

〔自伝小説〕

わが道を求めて（第十一回）

記念写真の思い出

長崎 明

さしえ 竹内秀明

私は幼少の頃すぐく泣き虫だった。泣き虫のくせにもものすごく我が強く、自分のやりたいことは、どこまでもやり通さなくては気が済まないし、逆に、やりたくないことは意地でもやらないところがあって、たぶん学校の先生には扱いにくい生徒だったに違いない。

学芸会の思い出

ここに一枚の写真がある。双溪小学校二年、学芸会後の記念写真である。

学芸会の一カ月前、練習を始める前に、その出し物と役割を決めねば



写真の学芸会

ならない。担任の小山先生は、私に「はなさかじい」の劇の中の「とのさま」の役を割り当ててくださった。それは恐らく私の性格を見込んだことだったに違いない。

小山先生にしてみれば、日頃泣き虫で意地っ張りの私に殿様の役をやらせれば、少しは自信がつくのではないかとの思いやりがあった。私の父は台湾の子供達を教える公学校の先生で、小学校と公学校の違いはあれ、先生どうしの交流があるので、当然、あの子は長崎先生の息子だと承知していて、やさしい中にも、それなりにちゃんと教育しなければとの意識も働いたことだろう。そのうえ、この写真に写っている二七人が全校生徒である。学芸会ともなれば、一人一役、必ず何か割り当てないと間に合わない。上級生になると二役も三役もこなさなければならぬ。

私も「とのさま」になれるので大満足だった。しかし、練習が始まってみると、どうしてもせりふが言えない。この劇では花咲かじいが一番の大役で、出づっぱりのうえ、せりふも多いから、私には無理なことは初めから分かっていた。殿様なら劇の最後に馬に乗って出て来て「枯れ木に花を咲かせて見よ」というのと、枯れ木に花が咲いたところで扇子を開いて「あっ

ばれ、あっぱれ。褒美をとらず」とか言えば良いだけである。ところが、そのせりふがなかなか言えないで例によってメソメソ泣き出す始末。「じゃあ、何がやりたいの」と、さすがの小山先生も手のほどこしようがない。

私にしてみれば、そもそも学芸会に出たいとも思わないのに、先生が「出る、出る」というから、「出なければ」と思っただけである。でも、私なりのプライドがあるから、出るからには「とのさま」が良いとは思ったが、やれ、馬に乗れだの、やれ、扇子を開けの、おまけに、せりふまで言えに至っては、ひとまえて物をしゃべることが一番嫌いな私に、耐え切れるものではなかった。

そのとき、私自身が希望したのは、なんと家来の役だった。家来なら殿様の後からゾロゾロ付いて出ればよい。せりふも何一つ言わなくてすむ。所作も何一つ覚えなくてすむ。プライドなんか、どこかに飛んでしまった。

こうして、学芸会が無事に終わって、記念撮影になった。その結果がこの写真である。ごらんのとおり、私は最前列の左から三人目にいる。実に毅然たるものである。陣笠をかぶっているくせに、まさに「とのさ

ま」気分である。おかげで両側の御同役は身をすくめている。肝心の殿様も馬も見えないのは、上級生が二役を演じてくれたからであろう。

最後列の左に砥上校長先生、右に小山先生、向かい合う形で子供達を見守っていてくださる。もう一人上級生担任の先生がおいでだった筈だが、何かの都合で見えなかったであろう。お名前も面影も全く思い出せないのは、習ったことがなかったからに違いない。今では、この写真に写っている人の中、名前が分かるのは先生二人と私自身だけ。生徒の方は、同じ学び舎で机を並べたのに、一人も名前を思い出せないし、消息も分からない。

運動会の思い出

運動会の最後の種目、全校生徒による体操の写真がある。左から三列目の前から二人目が、三年生の私である。何事にもくそ真面目だったので、一生懸命に手を振りあげるポーズをとってはいるが、実は運動会も私の大嫌いな学校行事の一つであった。

皆と一緒に手を振り、足を上げ、腰を曲げるというように調子を揃えるのが、すこぶる苦手であった。身

体を動かすこと自体はそれほど嫌いではないが、どうしてもワントテンポ遅れてしまうのである。予め決められた次の動作を頭に入れておいて、つぎつぎと行動に移すという器用さは、生まれつき私にはあまり備わっていないかったようである。だから、他人の動作を見ながら、その後を追いかけるだけ遅れてしまう。

このような無器用さを自覚したのは、台北高等学校の二年生（十八歳）の時、剣道の型を覚えさせられた際である。剣道の型というのは、二人で向かい合って攻めと受けを代るがわるやるのだが、私はどういうわけか、相手と同じ動作を少し遅れて真似してしまうのである。これでは型にならない。高校では授業のほかに剣道部に入り、部活動を真面目にやったので、教師が剣道初段の試験を受けさせてくれた。だから、剣道の試合そのものの強い弱いとはもなく、型だけは覚えなければならなかった。初段試験の型は七種類くらいだったかと思う。前の日まで特訓を受けて、どうやら覚えただけだったが、当日、二つ目か三つ目の型のとき、頭がかつとなってしまって、あとは支離滅裂、自分でも何をやったか、まるで記憶にさえ残っていない始末。自分がしくじったのだから、私の落第は当然だが、相手になってくれた同級生も一緒に落ちてしまった。失



運動会の写真

敗した私には構わずに、正しい型を最後までやり通さなかつたからだだと、試験官から指摘されたが、本当に申し訳ないことをした。それから何カ月か後に二人だけ再度のチャレンジが認められ、ようやくパス出来た。大学教授時代、学生から「先生の特技は何ですか」と聞かれると、「何を穏そう。これでも剣道初段だよ」と胸を反らしたのだが、これが偽らざる真相である。

小学校の頃から運動会が嫌いだった理由は他にもある。それは、足が非常に遅くて、どんな駆けっこでも必ずビリになったからである。この写真の運動場は、丘の上をさつと均らした程度だから、一周百メートルのトラックがやつとで、低学年はその半周五十メートルの駆けっこや、木のスプーンにお手玉を載せて走る競争や、まりを蹴りながら走る競争など、何か一つに出場させられたが、どれに出てもビリはビリで、ご褒美のノートや鉛筆を買った覚えは全くない。身体が弱くて泣き虫だったのに、長男は長男らしくとプライドばかり高くなるよう仕付けられたので、例え身体の大きい同級生といえども、その後塵を拜して追いかけるのは、私にとって拷問に掛けられるより苦痛だった。他人と調子を合わせる協調性に欠け、内心は負けず嫌いなのに、動作が鈍くて負けてばかりいる。自分で

も齒痒くて仕方がない。泣くことによって自分の世界を取り戻す術を覚えた。こういう私を私以上に齒痒く思っていたのは、他ならぬ私の父だった。

頂双溪という台湾の片田舎だから、小学校で運動会があるときは、公学校の先生も応援に駆けつける。公学校に学ぶ台湾の子供達も運動会を見にやって来る。写真は全校生徒の体操なのに、運動場の回りに子供が見えるのはこういうわけである。それはともかくとして、作詞・作曲・歌唱・振り付け・踊りまで一人でやりこなし、体操も達者だった父に見れば、自分の目の前で我が子がぐずぐず・めそめそしているのは、どうにも耐え切れなかったに違いない。

この運動会の種目に、「親子競争」といって、目隠しをした親に子供が肩車をし、親の耳を右に左に引っ張って、百メートルのトラックを一回りする競争があった。私はそんな競争に出る意志が全くなかったが、父が「出よう」というので、仕方なしに父の肩車に乗ってスタートラインについた。それまで父に肩車をして貰ったことがなかった。家で父が「肩車をしてやろう」といっても、あんな高いところに乗る気がしなかった。

運動会で大勢の人が見ている前で、初めて父の肩に

乗っただけで、もうガタガタと身体が震えて止まらな
い。まるで屋根の上に乗った程の高さを感じた。用意
・ドンが鳴るや否や、父は脱兎のごとく、あるいはま
た、駿馬のごとく疾走し始めた。父はどうしても勝ち
たかったに違いない。競争に勝つことの喜びを私に味
わせてやりたかったのだろう。「勝つとは、こういう
ことだ」と見本を示したかったのかも知れない。

驚いたのは他ならぬ肩の上の私であった。父の耳を
右に左にと、やたらに引つ張った。勘の良い父は恐ら
く予めコースを読んでおいて、私からの合図がなくて
も目隠しのまま一回りするつもりだったろう。父はそ
れくらいのが出来る人である。ところが、騎手の
私は怖さのあまり、あっち・こっちと合図するので、
さすがの父も方向を見誤ってカーブを曲がり切れず、
運動場の端の垣根に激突した。はずみで私は垣根の向
こうまで投げ出されそうになった。垣根の向こうは絶
壁になっていたから、一瞬の間に父が私を抱き留めな
かったら、私は真つ逆さまに墜落していたであろう。
この写真を見るたびに、そのときの情景をまざまざ
と思ひ起こすのである。私が軽いながらも高所恐怖症
なのは、こうした体験が遠因となっているのかも知れ
ない。

修学旅行の思い出

小学四年になって、初めて頂双溪から台北まで、汽
車に乗って修学旅行に連れて行って貰った。台北では
必ず台湾神社に参拝するのがお決りだった。

大日本帝国時代の日本では、天皇を神格化するため
に、伊勢神宮の崇拜が強制されたのと同様に、植民地
の台湾では天照大神と北白川宮能久親王を祀る台湾神
社がその役を果たしていた。北白川宮は台湾鎮定のた
めに派遣された近衛師団の団長で、明治一八年（一八九
五）一〇月、全島平定とほとんど時を同じくして台南
で死去した。

当時の学童である私たちは、繰り返し繰り返し、我
が国が神国であることを教えられるとともに、その証
として台湾神社の参拝を強いられた。そして、北白川
宮が皇族でありながら御自ら台湾鎮定に御出征になっ
たのを、あたかも神武天皇が高天原から天降り賜うた
のと同じくらい、尊い出来事として頭の中に叩き込ま
れた。

日清戦争の結果、日本に割譲された当時の台湾は、
伝統的な根強い反日感情と、これを機会に台湾民主国



修学旅行の写真

の独立を期待する気運とが、一時的にせよ手を結んで強力な抗日戦線を可能にした。近衛師団を投入しての鎮定は、先手を打って即戦即決をねらう大方針から出たものであった。

台北には、この台湾神社のほかに建功神社というのがあった。これは台湾平定に生命を捧げた人びとをまつるお宮で、靖国神社に匹敵するものといえよう。小学四年の修学旅行で、この神社にもお参りしたかどうか、記念写真がないし、記憶も定かでない。

台湾神社の大鳥居の前での記念写真の最前列、右から四人目が私である。ちゃんと気を付けの姿勢をとったつもりだが、わずかに隣りの女の子の方に体が傾いている。この子の事を全く覚えていないから、特に仲が良かったわけではなく、たまたま隣り合っただけに違いない。それにしても、ちょっと手を握っているように見えるのが、われながら気にかかる。

男の子が同じ帽子をかぶっているところから見て、恐らく制帽はあったらしいが、服装がまちまちだから男も女も制服という程のものはなかったのだろう。お握りでも入っているのか、カバンや袋を肩にかけ、水筒の掛け方も統一していない。みんな一様に緊張してはいるものの、天衣無縫、型にはまっていないところが

ほほえましい。校長先生はいつものように官服姿で威厳を保っているのに対し、小山先生は少し疲れているように見える。頂双溪から台北まで汽車で一時間くらいだから、日帰りの修学旅行だったが、それでも四年から六年までを一緒に引率して出かけるのは容易ではなかったろう。

私はこの次の年から、父の転勤でこの台北に移り住む事になるのだが、神ならぬ身の知る由もなかった。

〔追記〕

今回お目にかけて写真は、一九四二年私が内地遊学のため離台するにあたり、家族のアルバムから私の分だけを秘かに剥がして持ち出したものである。当時、既に日本の劣勢は明らかで、アメリカの潜水艦が内台間の海洋を遊弋していたから、日本の艦船は例え客船といえども撃沈される危険性があった。

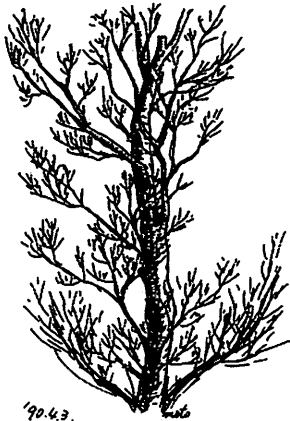
私は写真を持ち出した代償として、自分の頭髮と爪を小さな桐の箱に納めて、私がそれまで使っていた机の引き出しに入れてきた。

その後寫真は私と一緒に何十回となく日本列島を移動したが、今日こうして皆さんに見ていただく機会を

得た。残してきた頭髮と爪はどうなったか分からないが、幸い元気なのが私の身体に未だたくさんくっついていてる。

自分の髪や爪を万一のために切って残すことに、私はそれほどの悲壮感を持たなかった。当時はそういうことが日常茶飯に行なわれていて、生と死の問題をそれほど深刻に考えるゆとりがなかった。二度とそんな時代を迎えたくない。

(ながさき あきら Ⅱにいがた県民教育研究所会長)



190.4.3